

だ。名づけ子は、たちまち、見立てのうまい医者として成功して、金持ちになるが、ある時、病人の上下を置き換えて、助からないはずの病人を二度も無理やり助けたため、怒った死神に、無数のろうそくに人の命の灯がともる洞窟に連れていかれ、病人に寿命を譲ったために短くなって消えそうになっっている自分のろうそくを見せられる。死神は、名づけ子の懇願に応じて、消えかかっている灯を新しいろうそくに移すふりをするが、わざとしくじって、灯は消え、名づけ子は死ぬ(文献(金田))。

これが、グリム童話「死神の名づけ親」(原題“Der gevatte Tod”)のあらすじだが、冒頭の、死神が選ばれる論理がむしろ、神という最高の価値があつさり否定されるところが痛快である。死神が身近な存在になっているところもむしろ、中でも、一度は、死神をあざむいて、死ぬはずの病人を助けるところは、因果律の転倒であって、ろうそくの灯に支配されているはずの人間の運命への反逆であり、ナンセンス童話としての味わいがある。「死神」という概念は、もちろん、キリスト教という一神教がヨーロッパ文化を支配する以前の多神教の時代に生まれたものであろうが、キリスト教の時代のはずのグリムの時代に、なお、この

ような話が、民衆の間で語られていたという事は、注目に値する(註一)。一神教たるキリスト教も、たてまえにすぎないという事なのか。「信じる」という言葉の意味についても考えさせられる。一神教の否定というのは、ヨーロッパにおいては、考えようによつては、あらゆる社会的価値観の否定でもあり、これこそ、ナンセンス童話の本質である。ところが、これとそっくりな日本の落語が存在する。

落語「死神」

落語「死神」は、台本があるわけでもなく、演者によつて、様々なヴァリエーションがあるが、まず、比較的正統的と思われる(円朝)のテキスト(二代目三遊亭金馬の口演の記録)に基づいて紹介しよう。

貧乏な主人公の男が、子の名づけ親をたのむ金がなく、困つているところに死神が現れ、医者になって金儲けをしろという。死神が言うには、死神が病人の足元にいれば病人は助かるが、頭の方にいたら助からないという。おかげで、男は、たちまち、見立ての良い名医となるが、ある時、病人の上下を置き換えて、助からないはずの病人を無理やり助けた